

セヴリーヌ「中絶の権利」

相 澤 伸 依 訳

解題

ここに訳出するのは、*Gil Blas* 紙 1890 年 11 月 4 日版に掲載された「中絶の権利 (Le droit à l'avortement)」と題された記事である¹⁾。執筆したのは、カロリーヌ・レミ・ドゥ・ゲパール (Caroline Rémy de Guebard, 1855-1929) という女性である。彼女は、Séverine や Jacqueline といったペンネームを用いてジャーナリスト活動および政治活動を行い、フェミニストの先駆けとも目される。

フランスでは、1810 年の刑法典によって、人工的に妊娠を中絶することが墮胎の罪となった。特に普仏戦争 (1870-1871) の敗戦以後は、強力な出産奨励政策が取られた。19 世紀後半のフランスにおいて、中絶は国家に対する犯罪とも考えられていたのである。そのような社会状況の中で公にされた「中絶の権利」は、墮胎罪への反対と中絶の権利の保障を、最も早い時期に訴えたテキストである。今日の中絶の権利をめぐる運動のルーツになるテキストの一つとも位置付けられ、*Le Monde* 紙は 2020 年 3 月 8 日の国際女性デーの際、紙面に再掲した²⁾。

その歴史的意義と今日的意義を考えるために、以下に全訳する。なお、初出時の署名は Jacqueline であるが、この翻訳では最も知られたペンネームである Séverine を付す。また、脚注および [] 内の補足は全て訳者による。

セヴリーヌ「中絶の権利」

編集長、そして親愛なるみなさん、あなた方はトゥーロンの惨劇³⁾ について私に意見を求めました。これは危険なことでした。私が表明できる見解は、ここで公表される、最もリスクの高い実話を、正直で家庭的なものに見せようとする大胆さに由来します。

ご存知の通り、不道徳さ (l'immoralité) には二種類あります。一つは、笑いながら元老院議員の臍をくすぐるタイプの不道徳さ。あらゆる体制はこの不道徳さを奨励してきました。もう一つは、重々しくも、ある種の問題群を前にして立ち止まるタイプの不道徳さです。も

セヴリーヌ「中絶の権利」

し誰かがあの汚辱の中に沈み込み、絶望、見捨てられた完全なる不安、絶望の中で全力で助けを求めるとしたら、主体の生々しさを動揺させず、汚辱の中を震えも吐き気もなしに臓物まで進んでいくタイプの不道徳さです。

私の不道徳さは、後者のタイプのものです。そしてこの不道徳さの手綱を緩めることにしましょう。これは、私のことを少しでも家庭の貞女だとみなしていた人々を驚かせるでしょう。しかし、他の人々、行間を読むことに慣れ、今日私が書くことが昨今書いてきたことの完全に論理的で不可避の帰結であると理解するだろう人々を驚かせたりはしないでしょう。

まず、事件が起きたその日から「トゥーロンのスキャンダル」と呼ばれている事件そのものについて、一言言っておきましょう。ああ！ 確かになんと厄介なスキャンダルでしょう、被告人よりも検察官によるスキャンダルだなんて。最新の司法の愚かさ。テミス⁴⁾ に対する何たる失言！

しかし、失言とはなんでしょう。それは復讐の悪臭を放っています。田舎臭く、籠えた、カビの臭いがします。老いた女の悪臭とイラついた法律家の芳香。それは、昨日まで力を持っていた敵に対する一味の復讐に非常に似ています。検察官の、「よき社会」の、そして海軍当局の激しい怒りによって、一人の男〔の人生〕が粉々になったのです。

トゥーロンのスキャンダルがどんなものか、あなたはご存知でしょうか？ それはマロ⁵⁾ の小説のようなものです。『義理の弟』や『医師クロード』⁶⁾ のように仕組まれたものです。一人の男の周りに織り込まれた田舎染みた遺恨の途方もない紛糾であり、その男を縛り上げ、締め付け、窒息させたのです。

私が、有罪ではない (non-coupable) と言って擁護しているわけではないことに注意していただきたいのです。フルー氏⁷⁾ が、彼が告発されていることを行った可能性は大いにあります。しかし、だからなんだというのでしょうか。そのせいで彼の市政がよくないものになるのでしょうか？

法廷にいる人々にとって、フルー氏が着席した時、もし彼が出廷するとしてですが、裁判官と同様に証人も、陪審員と同様に傍聴者も、そして廷吏、憲兵も加えると 100 人以上の人々が法廷に居合わせるでしょうが、彼らは皆同様に同じ犯罪の中にいるのです。

中絶！ 私はまず、いつどこで中絶が始まるのかを教えてくださいたいと思います。私は、*Gil Blas* 紙の読者に堅苦しい話をさせることに慣れていないけれども、確かに今回は、私の言葉を曖昧にしておくことには代償が伴います。

出合いの結果から逃れようとする男、未来の支払期日を直接に守ろうとする女。彼らは中絶をした者なのでしょうか？ 本来なら、法は Oui と言うべきです。そうになると、青い麦を蒔く見苦しい男オナン⁸⁾ も中絶をする者だということになるでしょう。それによって、

イスラエルの地の芽吹きと収穫が妨げられなかったわけですが！ しかし、だとすれば、中学校も、寄宿舎も、兵舎も、修道院も、船舶も、あらゆる思春期の少年少女、男たち、女たちの集まりも、片方の性が互いに招きあい、幻想を抱く場所は、中絶工場ということになります。

一体いつ、中絶は違法なものになり、いつ違法でなくなるのでしょうか？

教会は、中絶の禁止と抗弁において、少なくとも筋が通っています。では法律はどうかといえ、冗談のような有様です。

あたかも良心が、—これはこの世の唯一の法です！—この区別を付け、逃げ口上を盾に取るかのように。一つの存在が地上に放たれるやいなや、それがあまりに小さく、あまりに儂く、その醜さと弱さゆえにあまりに人の心を打つのです。最初の泣き声を上げ、小さな手を振り、小さな足を動かすやいなや、その存在は生き、神聖不可侵になるのです。

まず、女がいる、いや女しかないのです！ 難産の場合に、医師が躊躇なく母親を救い子供を死ぬに任せるのは、全く正当なことです。

もしこのような医師たちを中絶する者として扱うなら、彼らは呆気にとられるでしょう！ 「では、人口増加は？」と経済学者たちは言います。

人口増加という哀れな偽善が、この事例と何の関係があるでしょう。よくもこんな言葉を発せられるものです。

人口増加！ 10人、12人の子供を抱えて、この社会国家の中で、食い扶持も住む場所も見つけられない多数の家族は、何をしてもらえらというのでしょうか？

私のかつての同僚で*L'Eclair*紙のトップだったモントルグイユ氏が、人々の怒りを掻き立てる、このような現実の一例を紹介しています。その例を見てみましょう。

「マンガナ氏は大いなる賞賛を受ける職人芸術家である。最近、パリのバイエン通り13番地に居を構え、1889年の万国博覧会では、驚くほど繊細に仕上げられた絨毯が表彰された。この実直で勤勉な職人には11人の子供が生まれ、7人がまだ残っている。この六週間、彼は住む家がない。なぜなら、彼が「住めるか」問い合わせた家はどれも子供が住むことを望まなかったからだ。彼は10軒が連なる長屋のような小さなアパートを順に借りた。彼は各アパートの管理人に頼み込んだ。しかし、その頼みも突き返された。子供達が到着するのを見るや、皆、一家を受け入れることを拒んだのだ。ドゥムール通り74番地、ポンスレ通り3番と10番地の管理人を特に挙げておこう。マンガナ氏は、頼み込んでなされた口頭の賃貸契約が実行されるよう警察に問い合わせたが、警察は介入することを拒否した。こうして、子供を理由に、6週間にわたって、強制退去の苦痛が続いたのだ。不幸な職人は、この期間、才能秀でた絨毯修理の仕事をすることはできず、貯金を取り崩して食いつないだ。病院に入っていた妻と二人の娘以外、貧しい家族は彼の老いた父親の部屋の中ですし詰めだった。」

セヴリーヌ「中絶の権利」

人口増加！ アイエン一家の最後の糞を拾って、餓死しそうな人々に人口増加を説き勧めて憚らない奴らを糞まみれにしてやらねばなりません。

多くの子孫を抱える家長のために何をしてもらえるのでしょうか？ 彼らに報いや励ますものは与えられるのでしょうか？ 援助や支援は？ 彼らの負担や重くのしかかる義務や押しつぶすような責務を軽くするための措置は？

そんなものは何もありません。苦勞、悲惨さ、そして自殺。これが彼らへの分け前なのです！

独身者に課税する前に、あるいは助産婦たちの汚い洗濯かごの中を調べる前に、法律は借金を返すべきでしょう！

生まれてくるポールが、ジャックやピエールやジャンヌの口からパンを取り上げないのであれば、結婚しているならなおさら、子供を増やすことを避けようとする下町の女は減るでしょう。それ「子供を増やすこと」は、全てを諦めることであり、困難です。さらに言えば、悲惨です。彼女たちは、時に母親としての愛情から中絶を行うのです。このことは、社会経済の中の労働者の女性たちについてはもちろん、官職に就く女性たちについても想定されていないことです！

自分自身の評判よりも自分の周りの人々の平安を守るために、自らの生をリスクにさらす女性たちに関して言えば、刑法だけに責任があるような偏見に身を捧げているのです。なぜなら、そのような考えを持つのが人間本性からではないのは明らかだからです。

男たちが自分たちの名誉を女たちのペチコートの下に置いた時、彼らは同時に、罪を負わせないように、そしてこの名誉の外見だけでも救おうと女性たちが犯すあらゆる行いに罰が科されないように、注意を払うべきだったのです。

そうしないことは非論理的で残酷です。

結局のところ、繰り返しになりますが、自らの臍物にへばりついた母性を拒否する女たちは生をリスクにさらし、危険は最悪の行為を気高いものにします。

平和な時代にスパイでいることは、浅ましく、卑劣なことです。一方、戦争の時代にスパイでいることは、英雄的で気高いことです。風俗 (mœurs) を取り締まる警官は軽蔑されます。一方、安全を守る警官は尊敬されます。一体なぜ？ どちらも同じ職業であり、動機ももたらすものも変わらないというのに。

しかし、確かに、脅威はあります！ 銃殺部隊の十二の銃弾が、刺客の短刀が紋章になります。死が信任を与えるのです。

この罪を犯した肉体、この女罪人はその肉体を墓に差し出します。彼女は自分が死ぬことをわかっているし、永遠に自分が弱っていくこと、美しさ、健康、力を失うことをわかっているのです。彼女を行動させる動機は、激しい不安への反抗よりも強力です。

もし彼女を批判したければすればよいのです。私は〔批判など〕しません！

善良な人々は言います。「魅力的な女たち⁹⁾は、身体の線と表情の輝きに不安を抱えているんだらう？」と。

そんなことはほとんどありません。今日、女たちは、歳をとってからの「事故」〔中絶〕が出産よりもはるかに彼女たちを老けさせ、衰えさせるという知識を教えられています。そして、笑えることに！ 件の善良な人々は、自分たちの子供をギリシャ文明への崇拜の中で育てながら、〔古代の〕アテネの人々が、「こんなにも完璧な傑作が損なわれるリスクにさらされることを望まなかったため」、フリユネ¹⁰⁾の中絶に賛成したことを無視しているのです。

私たちは古代ギリシャに生きているわけではありませんが、毎日必死に生きて、〔妊娠出産という〕一年にわたる失業を被ることはできない可哀想な貧しいフリユネたちは増え続けています。

多くの気の利いた女たちは、最初に意表を突かれて一人は子供を持つものの、それ以上欲しいとは思わないものです。予約を取り消すのです！

他の仕事をすればよいと？ 人手の方が仕事よりも多いというのに。真面目な女の労働者は、仕事がなく、悲惨な状況で死にそうになっています。この苦しい仕事をめぐる競争は何をもたらすでしょうか。現状のままにしながら、他の女たちの復讐をしたほうがよいのです！

彼女らが意識することのない哲学が、閨房から生まれる子供たちの運命によって掻き乱されます。36人の父親がいる子供たち？ 娘っ子の息子たち？ 快樂のための肉体だった彼女たちが、悲しむ肉体に？ ああ！ 例えの話ですが！ 彼女たちの道徳性は、このような不道徳さを避けようとしません。

おわかりでしょう、中絶は不幸、不運であって、犯罪ではないことが。法律には、〔中絶をした〕彼女の、彼女ただ一人の行いの結果であるものを罰する権利はないのです。

私生児や飢えた人間が世界中のいたる所にいる限り、マルサス¹¹⁾の旗、未然の嬰兒殺し〔中絶〕の血に塗れた旗は、反抗的な売春婦たちの上にはためくことでしょう！ 彼女たちは、あなた方の方によって乳房を乾いたままにしておくよう強いられながら、自分たちの不毛の腹を守ろうとするのです。

附記 本稿は2020年度東京経済大学個人研究助成費（研究番号20-01）による研究成果の一部である。

注 _____

1) *Gil Blas* 紙は、1879年から1914年までは日刊紙として、その後1921年から1940年までは不

セヴリーヌ「中絶の権利」

定期に発行された。ゾラやモーパッサンなどが小説を連載したことで知られる。当時の紙面は、フランス国立図書館のデジタルアーカイブ Gallica にて閲覧可能である。<https://gallica.bnf.fr/>

- 2) “Séverine 《L’avortement! A quel moment est-il légal, à quel moment ne l’est-il pas?》”, *Le Monde* du dimanche 8 - lundi 9 mars 2020.
- 3) 海軍高官の妻、助産師、トゥーロン市長の三人が、ヤミ中絶を理由に逮捕された事件。このテキストは、同事件をきっかけに執筆された。
- 4) ギリシア神話の法・掟の女神。
- 5) Hector Malot (1830-1907) フランスの作家。日本では、『家なき子 (*Sans famille*)』(1878)の著者として知られる。
- 6) *Un beau-frère* (1869) と *Le docteur Claude* (1879)。いずれもマロの作品。
- 7) Alphonse Hippolyte Fouroux (1860-1937)。逮捕された、当時のトゥーロン市長。
- 8) 『旧約聖書』の登場人物。兄の妻タマルと子をなすよう父ユダに命じられるが、それに抵抗して性交の際に精液を地に漏らした(創世記 38 章)。最初に膈外射精で避妊を行なった者とみなされる。
- 9) 言語は “les coquettes”。売春婦というニュアンスも含む。
- 10) 古代ギリシアの伝説的な売春婦。
- 11) Thomas Robert Malthus (1766-1834)。イギリスの経済学者。『人口論』を著して、人口抑制の必要を論じた。